

### <研究ノート>フォン・シーボルトが創設した 出島オランダ印刷所

石山, 禎一 / ISHIYAMA, Yoshikazu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

68

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2009-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011575>

## 研究ノート

## フォン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所

石山 禎一

## はじめに

一八五九年（安政六）八月四日、ドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) は、息子アレキサンダー (Alexander Frhr von Siebold, 1846-1911) を伴って、三〇年ぶりに再来日した。その数ヵ月後に、彼は長崎出島でオランダ印刷所を創設したが、これに関する研究は、これまでその道の研究者によって少なからず発表されている。筆者が眼にした文献では、古賀十二郎著『長崎洋学史』上巻 長崎学会編（長崎文献社 昭和四八年再版）、ジョン・マクリーンの論文「シーボルトと日本の開国一八四三—一八六六」<sup>(1)</sup>、板倉雅宣の詳細な論文「オランダ商館文書にみる長崎の印刷

技術と活字<sup>(2)</sup>」、それにハンス・ケルナーの著書『ヴェルツブルグのシーボルト家一八・一九世紀の学者一家』<sup>(3)</sup>などであるが、いずれもその中に概略的に触れられている。しかし、これらの研究ではシーボルトの印刷事業の開始は分かるとしても、印刷された書籍の状況や印刷所廃業までの経緯に関しては、十分明らかにされていない。

そこで本稿では、なお取り残されているこれら諸問題について、『フォン・ブランデンシュタイン家所蔵 シーボルト関係文書マイクロフィルム目録』に収載の〈シーボルト自筆〉「私の手で出島に開設されたオランダ印刷所」De door mij te Dezima opgezigt "Nederlandsche Drukkerij"〈写真1、上〉に関連する印刷物および関係の書簡類、さらに呉秀三著『シーボルト先生其生涯及功業』乙編（吐鳳堂

大正一五年)に見られる史料、その他の文献等々を参照して考察することにした。なお、文中にある( )内の記述は、筆者による注であることを付記しておく。

### 一 シーボルトの印刷事業準備と印刷技師ゲ・インデルマウル

シーボルトは再来日の前年(一八五八年)六月二〇日に、ボンからアムステルダムのおランダ通商会社秘書官宛に書簡を送っている。その中で「私は私の見込にて重要と思ふ著述の出版・石版術・印刷工場の管理及び重なる和蘭書籍商と外国商人との取引などによって、自ら日本の書籍貿易に携はることに努力致し」(「出島爪哇蘭語文書No.28」)と述べ、一二月八日にはボン、マインツ、ストゥットガルト、アムステルダム、ライデンの各都市から様々な品物を用意した。一二月二〇日にはオランダ通商会社に対して荷物の計算書を送り、事務手続を済ませ、引続き一二月三日には印刷器具、文房具、図引用具などを送付(「出島爪哇蘭語文書No.30」)<sup>(6)</sup>した。さらに、翌年(一八五九年)二月二一日には、同会社理事トラクラネン Trakraenen (生没年不詳)宛に、日本への送品七箱の内容を報告し、その内の第五箱に「印刷用紙・書畫用紙(二三リム)<sup>(7)</sup>」及び日本

字型タイプに有之、私は出島にある印刷機械にて小さき論文をほゞ出版致候積に御座候」(「出島爪哇蘭語文書No.31」)として、日本の活字を持参して、長崎出島で出版印刷を試みたいと記述した。このように、彼は再来日するにあたり、自ら日本の書籍貿易に携わり、日本において印刷事業の経営を準備していたのである。

再来日したシーボルトは、やがて長崎滞在のおランダ人印刷技師ゲ・インデルマウル(G. Indemauer, 1831-1888)と出会い、自らの日本における印刷事業の経営と書籍貿易について語り、印刷工および植字工として任務に従事するよう要請した。

ゲ・インデルマウルは、ユトレヒト出身の印刷技師で家業は印刷業であった。一八五七年(安政四)九月二二日、カッテンディケ(W. J. C. Ridder Hysse van Kattendijke 1816-1866)を長とする海軍伝習所第二次教官一行に看護長(病人のベット付添い、医官の補助)として来日した。その際に新活版印刷機、欧文活字、インキ、用紙などを持参して、西洋式の印刷を行ない見せている。<sup>(10)</sup>彼は当時、長崎では早業活版師といわれ、印刷の技術は実に巧みであった。その下で印刷の伝習を受けた日本人は著しい進歩を見せたという。<sup>(11)</sup>彼は一八五九年一二月一日まで、出島で海軍

フォン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所(石山)

伝習所の一員であったが、退任前の一〇月三〇日にシーボルトの下で印刷技師として従事する契約を交わした。その契約文書は「フォン・ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係文書」の中に、「シーボルトとゲ・インデルマウルとの合意文書」(原文は手稿の蘭文)<sup>12</sup>(写真2、下)として現存するが、そこには次のような内容が記されている。

「下記署名者たる私(インデルマウル)は、バタヴィアにおけるオランダ海軍の看護人としての任務を解かれた後、自ら進んで同地から日本へ戻り、下記に署名したヨックヘル・フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの下で、出島または別の地で活版印刷機を使い印刷工、植字工として、以下の条件で任務に従事する用意があることを宣言する。

一、出島に到着した最初の日から二年間またはそれ以上の期間に従事すること。(両者の契約が終わる一年前に、契約が一年後に終わることを確認し合うことを条件にした場合) また上記の任務とそれに関するすべての任務、そしてこの事業が要求する任務を遂行することを約束する。

二、出島到着の日から毎月一五〇ギルダーの署名付き支払いがなされること。支払い方法はオランダ領インド政府

がヨックヘル・フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの請求額を支払うのと同じ形で行なわれる。

三、オランダ弁務官(ヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルティウス Jan Hendrik Donker Curtius 1813-1879)が決めるところの家屋に住むこと。

四、最後に政府(オランダ領インド政府)から署名を受け、最後の仲介を受け、バタヴィアから日本への船賃を無料で通航できるものとする。また、母国への長い航海のために二〇〇ギルダーが支払われるものとする。今、合意した任務の年月を考慮して、可能なかぎり援助を差し伸べるよう取り計らうこと。これに関しては、オランダ領インド政府へ提案した。

(署名) ゲ・インデルマウル

(署名) ヨックヘル・フィリップ・フランツ・フォン・

シーボルト

一八五九年一〇月三〇日

この合意文書によると、ゲ・インデルマウルは看護長の任務が終了した後、出島で二年間またはそれ以上の期間、シーボルトの下で印刷工、植字工として任務に従事すること。毎月一五〇ギルダーが支払われること。オランダ弁務官の決めたオランダ人の家屋に住むこと。バタヴィアから

日本への船賃は無料で通航できること。帰国に際しては、長い航海のために二〇〇ギルダーが支払われることなどの四項目が決められた。

この合意文書が交わされた同じ日に、シーボルトはオランダ領東インド総督チャールス・フェルデインナント・パウウ (Charles Ferdinand Pahud 1803-1873) 宛に、印刷事業の開始にあたって、財政的援助を要求する書簡を送った。翌年一月二六日付第六号オランダ領インド政府の決定によって、出島の印刷事業の開設と維持のために、無利子で前貸金として一〇、〇〇〇ギルダーを受け取ることになっていた。彼はまた、二年間、毎年四、〇〇〇ギルダー

を受領することになっていた。すなわち、同年七月二五日に四、〇〇〇ギルダー、八月二七日に三、〇〇〇ギルダー、そして六一年一月二五日に一、〇〇〇ギルダーである。彼は出島で八、〇〇〇ギルダーを受け取った。この前貸金の返済は、六三年一月二六日から四月二六日までの期間に支払う義務を負うこととなった。総領事デ・ウィット (J. K. de Witt, 生没年不詳) は、当面シーボルトに出島における印刷事業を委ねることにした。<sup>13)</sup>

## 二 シーボルトの印刷事業開始

*Op der my te Gema. afzichte  
Nederlandsche Drukkerij.*

写真1 表題：シーボルト自筆「私の手で出島に開設された印刷所」〈蘭文〉一枚。

写真2 「シーボルトとゲ・インデルマウルとの合意文書」〈蘭文〉一枚。

一八五七年(安政四)一二月、長崎西役所にあった活字板摺立所は、江戸町の五カ所宿老会所に移され、ここでゲ・インデルマウルが日本人に新製植字の技術を伝授した。翌年、この活字板摺立所は廃止され、出島のオランダ商館内に印刷所(Drukkerij te Desima)が設置された。オランダ人は、これをNederlandsche Drukkerij(オランダ印刷所)と称している。従来、出島版といわれてきたものは(一)長崎西役所版、(二)江戸町版、(三)出島版、(四)出島オランダ商館の印刷所版の四

つである。<sup>14</sup> その出島版の変遷の跡については、すでに他の研究者によつて詳細な論考<sup>15</sup>があるのでここでは省略する。

一八六〇年(万延元)一月一日(旧十二月十八日)、シーボルトは不運にも仮住居の本蓮寺一乗院寢室で発生した火災で火傷を負い、下旬まで重体で病床に<sup>16</sup>ついた。このため、本来の任務であるオランダ通商会社の業務や学術研究、また自らの印刷事業の開設もできない状態にあつた。火傷の傷が癒えると、再び多方面にわたる活動の分野に着手した。

古賀十二郎の著述によれば、シーボルトの印刷事業に関わる資料として、東京の日独文化協会がベルリンの日本協会より借入れたシーボルト関係文献の中の「万延元年庚申年六月廿七日附、長崎奉行岡部駿河守より長崎駐在のオランダ総領事デ・ウィット宛の書簡と同年同月同日附の岡部駿河守よりシーボルト宛の書簡」の二通<sup>17</sup>を取り上げ紹介している。<sup>18</sup>

### (一)の書簡

六月九日附(一八六〇年七月二十六日)ニ而、シーボルト活版所并住居向取建候入費として、ドルラル引換替方申立候ニ付、其許一覽附之上、被差出候書面之趣披閱いたし候。無拗筋ニは、相聞候得共、普請為入用

引替候儀は、外国々より滞在いたし居候土官之向江も差響候事故、難承届候。乍併兼而及通達候通、其許役所用として、一ヶ月ドルラル千枚宛引替候高之壹分銀は備置候間、此方之内を以其許よりシーボルト江振向ケ遣候様被致候ハ、都合ニ可相成哉被存候ニ付、右等同人より相談及候様申遣置候。依之此段折合方ニ申進候 謹言

万延元年(一八六〇年)

岡部駿河守

六月廿七日(八月二三日)

い・か・て・あつと君

### (二)の書簡

活版所并住居向被取建候入費銀引替之儀、此程中被申聞候趣は、無餘義筋ニ存候得共、外々響合も有之候ニ付、今般別紙之通、貴国コンシユル、ヘネラール江掛合候間、尚又其許より同人江被折合候方可然哉被存候。依之別紙掛合書写相添、此段申進候 不具。

万延元年

岡部駿河守 花押

六月廿七日

よんくへる・はん・しいほると君

これら書簡について、古賀十二郎は著述で「シーボルトが印刷所並に住居取建の件に就いて、六月九日附書面を以



一八六〇年二月（署名）ゲ・インデルマウル

この印刷所は出島のオランダ印刷所 *Desina ter Nederlandsche Drukkerij* として、商売をはじめた。これまでの出島の印刷所と区別して、これをシーボルト版と名付けた。<sup>(22)</sup> また三九種類の活字を載せた「出島印刷所活字見本」*In het belang van den handel en ter bevordering van den wetenschappelijken vooruitgang in Japan*（写真5）の印刷と併せて *NEDERLANDSCHE DRUKKERIJ*（オランダ印刷所）<sup>(24)</sup>（写真4、下）と称する説明文書も作成した。そこには、次のようなことが書かれている。

#### オランダ印刷所

オランダ領インド政府は、日本との貿易と日本における科学的向上の恩恵をねらい、署名者たる私に対し、オランダ印刷所の利用を可能にされた。したがって、私はここに謹んで商人の方々と文学愛好家の方々に、印刷物の見本と印刷所内にある活字見本を提供し、さらに新たな設備に対する関心を築き、広く一般また民間会社に好んで利用されるよう推奨し、それらのものの目標を達成すること、世界貿易や人々の文化生活の普及を促進することを推奨するものである。

出島 一八六〇年八月

ヨンクヘール・フィリップ・

フランツ・フォン・シーボルト

印刷における手順については、印刷技師のゲ・インデルマウルと協議し、また書籍出版に関することは、署名者たちと協議すべきものとする。

#### 三 シーボルトの印刷所で出版した印刷本

シーボルトが開設した印刷所で、インデルマウルが印刷したものに、前述の「出島印刷所活字見本」があるが、それ以降の出版物はすべて印刷者の名を *Gedruckt door G. Indemaaur*（オランダ語）とか *Imprimerie par G. Indemaaur*（フランス語）と印刷している。現存の印刷本としては四冊あるが、これを印刷年代順に紹介すると次のようになる。

(一)「一八八六年出島版、蘭日便覧日記帳」

一八六〇年（万延元）八月頃、最初に着手したのが「一八六一年出島版、蘭日便覧付日記帳」*Nederlandsche en Japanische Almanak voor het Jaar 1861. Desinater Nederlandsche Drukkerij 1861.*（一六・六センチ×九・九センチ、洋紙洋装本（二二八頁）と称する、オランダ人のための「日記帳」である（写真6、上）。その扉裏に *GEDRUKT*



フォン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所（石山）

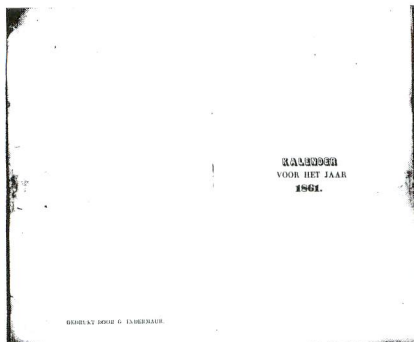


写真7 「日記帳の扉裏」の左下隅にGEDRUKT DOOR G. IJNDERMAURと明記してある。

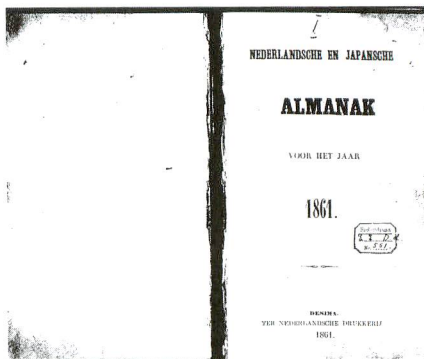


写真6 「蘭日便覧付日記帳の扉」(ドイツのポフム大学東亜学研究所蔵)。

DOOR G. IJNDERMAUR (インデルマウルによる印刷)と印刷がしてある(写真7、下)。巻頭には便覧の記事があり、その記事には(1)王室誕生日(2)七曜日表(3)キリスト教祭日(4)日本の祭日(5)出島における日出日没表(6)日本国、大日本、大島(日本、九州、四国)、小島(対馬、佐渡、淡路、種子島、壹岐、隠岐、屋久島、大島、八丈島、五島、天草、平戸)、属島(蝦夷、樺太)隣国(琉球、高麗)、(7)長崎における海水の高低(8)磁針の偏差度(長崎・下田、横浜、箱館)(9)出島における気象観測表(平均気温、風向、雨量)(10)日本の度量衡および貨幣(11)一八六一年一月一日現在出島、鮑の浦製鉄所、長崎、神奈川在住者名簿などが掲載されている。この日記帳は、おそらく同年一二月頃までに印刷を終えたものであろう。即ち、シーボルトが翌年(一八六一年)一月一日から一年間、「蘭文日記」、「独文日記」、「蘭独混合文日記」と分けて三冊<sup>(25)</sup>使用しているからである。

「日記帳」は濃灰色の麻布張りクロスであるが、これ何部印刷されたのか明らかではない。おそらくこの年限りで、それ以降の出版はなかったように思われる。現在は、現在シーボルト使用の三冊がドイツのポフム大学東亜学研究所図書室に所蔵されているが、オランダのライデン

民族学博物館には、年に数行の書き込みのある一冊がある。その冒頭の、日付のない欄にシーボルト自筆の「梅毒について」の見聞事項（独文）が見られる。他に板沢武雄博士が、戦前、ハーグの王立植民地研究所所蔵の、鉛筆で書き込みの一冊を詳しく調査され、「出島版の Almanak」〔学燈〕昭和一六年二月）と題して紹介しているものがある。したがって、現存する「日記帳」は合せて四冊ということになる。

一八六一年（文久元）一月八日、シーボルトはオランダ通商会社駐日筆頭代理人ポードウイン（Albertus Johannes Baudin, 1839-1890）を介して、インデルマウルに一分銀一〇〇枚のうち、現金で四〇枚を支払った。<sup>27</sup>後に残金が支払われ、三月七日付で、インデルマウルはポードウイン宛に一分銀一四〇枚の受領証を送っている（原文は蘭文<sup>28</sup>）。これはインデルマウルに支払われた給料をさしているのであらうか。記述の内容だけでは判断できないが、いずれにしても印刷所に関わる費用であることだけは確かである。

## （二）「日本からの公開状」

同年八月、シーボルトの『日本からの公開状』*Open brieven uit Japan. Jhr. Ph. von Siebold, Met het portret van den schryver. Desima, Nederlandsche Drukkerij, 1861. Ge-*

*druktdoor G. Indermaur*（二五センチ×一六センチ、洋紙洋装本 七〇頁）が出島の印刷所で出版された。この「公開状」は、シーボルトが再来日した一八五九年の秋から翌年夏までの時期の印象を書き綴ったもので、オランダ政府やオランダ通商会社宛に送った報告書も取り入れられている。内容としては、序文、第一公開状「日本における金の問題について」（一八五九年一月二七日、長崎の本蓮寺にて執筆）、第二公開状「金貨小判の高騰—日本におけるオランダ貿易の現状と予測—」（一八六〇年四月一日、長崎の本蓮寺にて執筆）、第三公開状「オランダ王国海軍の分遣隊—日本における海軍士官教官、および創立に関するその実地修練ならびにその王国における海軍の発達のために—」（一八六〇年六月一日、長崎の本蓮寺にて執筆）、第四公開状「江戸における御大老、最高政治評議員、井伊掃部守の死について—歴史的・政治的観点からみて—」（一八六〇年八月二日、長崎付近の鳴滝別荘にて執筆）で、他に将軍家慶のことから説きはじめ、井伊直弼の出自、あるいは国内の鎖国か開国かの議論をめぐる動揺などの記述、歴代将軍初代徳川家康から第一四代将軍家茂までの簡単な紹介記述となっている。この印刷本の出版部数は明らかではな<sup>29</sup>。

ところで、刊行本には二種類あるように思われる。それはこの本の見開き部分に石版画の「シーボルト父子像」が掲載されているものと、そうでないものが存在するからである。石版画のない印刷本（写真8、上）は、戦前、長崎大学経済学部教授武藤長蔵博士がオランダの古書店で購入したもので、現在同大学経済学部武藤文庫に所蔵されている。博士は自著の中で「これは長崎出嶋にて一八六一年に印刷された後シーボルト先生が或る和蘭（又は独逸）の貴族に贈りたるもので和蘭の古書肆にて賣られたものが私の入りたるもので、即ち長崎出嶋にて印刷せられ和蘭にシーボルト先生により贈られ再び長崎在住の私の手に戻り来たものである」として、さらに「扉に和蘭某貴族の紋章人の印あり、又筆者即ち著者たるシーボルトより自著献呈本ならんと思わるる自著の部分<sup>30</sup>」があると書かれている。後年、博士の所蔵本が同大学経済学部に寄贈され武藤文庫発足を機に、ここに収められた。昨年一〇月下旬、筆者は同大学図書館武藤文庫を訪れ、博士の述べられている本の扉側左上隅に van den Schrijver（著者より）のシーボルト自筆があるのを確認した。なお、他にミュンヘン国立民族学博物館図書室にも、武藤博士が購入したものと同じ石版画のない印刷本がある。これなども、おそらくシーボルトが

帰国時にヨーロッパに持ち帰ったものではないかと推察している。したがって、シーボルトが一八六一年に出島で印刷したものは、この石版画のない印刷本ではなからうか。もしこれが事実であれば、海外ではミュンヘン国立民族学博物館図書室であり、国内では長崎大学武藤文庫所蔵のものがシーボルトの出島で印刷所した唯一の貴重本ということになる。今後このようなシーボルト自著の献呈本や出島の印刷本が、ヨーロッパ諸国の図書館や諸機関、その他の場所で見つかる可能性もあると考えられる。

一方、石版画掲載のもの（写真9、中）は内外に多く現存する。筆者の調査では、ボフム大学東亜学研究所図書室、大英博物館、フランス国立図書館、アメリカ議会図書館、長崎県立シーボルト大学図書館、財団法人東洋文庫、横浜開港資料館、国立国会図書館貴重室などである。石版画掲載の印刷本扉画面下には、次のような記述が見られる。石版師ヤン・ヘンドリック・ホフマイスター（Jan Hendrik Hofmeister. 1823-1904）と石版印刷担当のヤン・ダム・ステーエルヴァルト（Jan. Dam Jan Steurwald. 1805-1869）の名が記載されている。この二人は、いずれも出島に滞在したという記録がないので、明らかに印刷本の一八六一年という出版年には疑問が生じる。

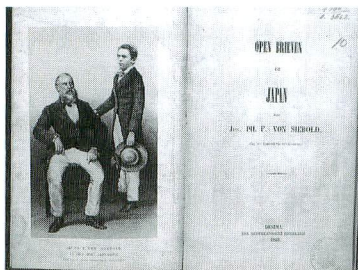


写真9 内外の図書館などに多く所蔵の石版画「シーボルト父子像」付の本。〈財団法人東洋文庫所蔵より撮影〉。

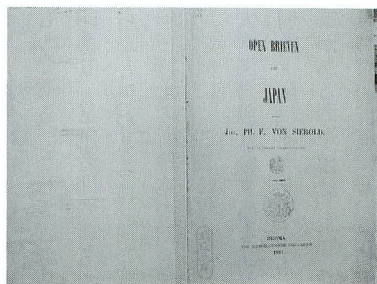


写真8 出島の印刷所で出版された国内唯一の貴重本と思われる。〈長崎大学経済学部武藤文庫所蔵〉。



写真10 「シーボルト父子の銀板写真」息子アレキサンダーが持参していたといわれる。アレキサンダー著『シーボルト最後の日本旅行』掲載より転写。

石版師ホフマイスターは、シーボルトの大著『日本植物誌』の原図や『日本動物誌』の甲殻類の図版を担当した人物で、このことを知っていた息子アレキサンダーが、後年オランダを訪れた際、日本で撮影の銀板写真（写真10、下）を見せて、これを石版画に描かせたものと思われる。彼は、父シーボルトが出島で印刷した未装丁の「公開状」の残部をすべてオランダに持ち帰り、これに「シーボルト父子像」の石版画を加えて、ライデンのセイトホフ（J. W. Sijthoff te Leiden）書籍印刷所で、印刷したものと思われる。ただ残念なことは、石版師たちが銀板写真を裏返しの状態で描いているため、「父子像」は逆の状態で刷られてしまった。原版は、現在ライデンの国立民族学博物館に

所蔵されている。銀板写真は、アレキサンダー・フォン・シーボルト著『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト最後の日本旅行』（原題「PH. FR. VON SEBOLD'S LETZTE REISE NACH JAPAN 1859-1861 VON SEINEM ÄLTESTEN SOHNE ALEXANDER FREIHERN VON SEBOLD」, Berlin 1903.）に掲載されている。その写真と石版画の「父子像」とを比較すると、一目瞭然その違いが分かる。なお、アレキサンダーが所持していた銀板写真は、シーボルトの末裔フォン・ブランデンシュタイン・ツツエペリン家に現存している。いずれにしても、この印刷本は、いまだ翻訳紹介はされていない。

### (三) 「日本に将来した書籍日録」

一八六二年（文久二）には、シーボルトの『日本に将来した書籍日録』Catalogue de la Bibliothèque, Apportée au Japon, par M. Ph. F. de Siebold. Pour servir à l'étude des sciences physiques, géographiques, ethnographiques et politiques et de guide dans les recherches et découvertes scientifiques danscet Empire. Dezima Imprimerie Néerlandaise, 1862.（一六センチ×二センチ、背皮厚表紙、洋紙洋装一〇二頁）が出版された（写真11、上）。書名の扉裏には Imprimé par G. Indermauer（インデルマウルによる印刷）

フォン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所（石山）

と印刷されている。この書籍日録の印刷は、シーボルトが前年江戸、横浜滞在より長崎に戻ってから直ちに着手し、彼がヨーロッパへ帰る五月七日以前に、終わっていたかどうかは明らかでない。この印刷本は自然科学、地理学、人類学、政治学などの研究並びに日本における科学的探究および発見の参考文献のために持参したもので、印刷された書籍日録の最後の中に掲げた「シーボルトの日本に関する諸著述」Ouvrages De Mr. de Siebold sur le Japon の終わりに、前年、出版の『日本からの公開状』を早くも載せている。この書については、武藤博士の「西暦千八百六二年（我文久二年）長崎出嶋の和蘭印刷所 (Ter Nederlandse Drukkerij, Imprimerie Néerlandaise) 刊行 Ph. F. de Siebold 氏蔵書日録」〔特に（一）政治、経済、農業、工業技術、商業（二）太平洋、印度支那、日本諸国航海記及其等地方事情に關する文献に就て〕と題した著述<sup>21</sup>で詳しく考察されている。蔵書日録の印刷本はポフム大学東亜学研究所図書室、長崎県立長崎図書館、京都外国語大学図書館、アメリカ議会図書館、国立国会図書館、国際交流基金図書館、九州大学図書館、財団法人東洋文庫などに現存する。なお、一九三六年（昭和一一）に日本学会と日独文化協会編輯 郁文堂書店の復刻があり、一九八八年（昭和





き、仕事もなかなか捗らず、ほとんど一年もこの本の印刷にかかった。そこで私もそれ以上続けてこの仕事をしなくなつた。しかしその後も、もつと進歩をとげた人々は私の手引書を日本語に訳して、それを印刷してはどうかと勧めてくれた。それがいくらかでも実行に移されるならば、私とその編集に費やした労苦も、この書物のもたらす一そう希望するけれど――利益によつて十分報いられることと思ふ<sup>32)</sup>と述べている。この記述を引用した古賀十二郎は、これがポンペの『薬学指南』のように書かれているが、板倉雅宜の論文によれば「ここに「薬理学に関するもの」となつているので、一八六二年シーボルトの印刷所で印刷されたものと思われるふしがあるが、これは日本人が組版印刷を行つた【Korte Beschouwing der Pokzieltel】〈痘瘡および牛痘接種法〉のことを指しているのだらうと推測される。…この本を出版されたものに、八木弥平訳「散花小言」一八五八年出島版がある。ちなみにこれは木版刷りになつてゐる」と考察されている。いずれの論考もポンペの著述に関連して書かれているのであるが、このことについては、板倉論文の印刷技術と活字面から究明された推測説の方が、むしろ当を得ているのではなからうか。なお、この印刷本に関する詳細な研究論文に、佐藤恒二著「ポンペ

フォン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所（石山）

著出島の和蘭印刷所出版の薬物学書」〔日本医事新報〕第八五六号 昭和一四年）、緒方富雄著「佐藤恒二博士 ポンペ著出島の和蘭印刷所出版の薬物学への追加」および岩熊哲「出島版ポンペ著薬物学書に就いて」〔中外医事新報〕第一二七号 昭和一四年）がある。

#### 四 シーボルト印刷所の廃業

滞在二年後の一八六一年三月、シーボルトはオランダ通商会社との関係が終了すると、幕府の外国方顧問の招聘を受諾し、外交の助言と学術教授などの公的身分を帯びた任務に就くこととなつた。オランダ政府は、彼が四月に長崎を離れて江戸に向かうとき、もはや印刷事業に従事しないと考へた。対日活動に関する彼の覚書の中で、印刷所について何も記述していないと述べている。事実、シーボルトの来日後の自筆日記や覚書、草稿などにも印刷事業の経営をはじめ、書籍貿易に関する記述は、筆者の調査した史料では見られなかつた。それは幕府外交の指導と助言、彼本来の目的である学術研究などに忙殺され、印刷事業まで従事する意欲はすでに失せていたのではなからうか。のちにオランダ政府はシーボルトに対して、前貸金の総額八、〇〇〇ギルダーを返済すべきだと迫り、一方シーボルトも

出島の印刷事業で被った大損失の補償をオランダ政府に要求している。<sup>36</sup>この間の事情は、ジョン・マクリーンJohn Macleanの論文論文に詳しく考察されている。

一八六二年一月、インデルマウルはジャワからシーボルト宛に書簡書簡を送った。そこには、次のようなことが書かれている。

下記の署名者たる私は、最も尊敬すべきヨシクヘール・フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト氏から、一八六〇年六月から一八六二年六月までの月給一五〇ギルダーを受け取り、(シーボルト氏が)七月二日までに私がここから……号(船名解説不能)でバタヴィアに行くための船賃として、さらに二〇〇ギルダーを支払ってくれたことを証明する。

一八六二年一月一日

ゲ・インデルマウル

この書簡で明らかなのは、シーボルトが、以前、印刷所創設にあたって、インデルマウルと取り交わした『合意文書』の通り、月給一五〇ギルダーと帰国への航海のための船賃二〇〇ギルダーを支払ったということであろう。

シーボルトは、同年五月にすでに帰国しているのので、書簡の内容から七月インデルマウルが日本を離れたことに

よって、三年有余続いた出島の印刷事業も、六月末日をもって廃業されたと推測される。明治に入ると、これまでのオランダの印刷技術は活かされず、やがてオランダ通詞、印刷、活字鑄造、製鉄などの研究家および事業家の本木昌造(一八二四—一八七五)によって、中国の活字鑄造法が導入され実用化されることになった。

#### まとめにかえて

シーボルトの再来日は、オランダ通商会社の顧問として、同会社の貿易に関する様々な提言を行なうものであった。しかし同会社の契約が切れると、やがて幕府の外交顧問として政治にも関与し、遣欧使節派遣計画の相談役を請け負い、学術教授では従来のような専門分野に限らず、国際関係にも講義を及ぶなど多忙な日々となった。さらに欧米諸国に対しては、日本に平和裡に開国に迫ることを建言し、幕府側にも欧米諸国に対して理解を深めるべきであると進言するなどしたが、シーボルトの意図する外交は結果的には時すでに遅く、彼の胸中にあつた国際政治家として開国日本の文明誘掖に寄与したいという希望ないし野心野心も、もはや夢と化して現実には虚しいものとなってしまった。こうした状況の中で、シーボルト本来の目的でもあ



る、大著『日本』、『日本植物誌』の未完部分の完成と、『日蘭英仏辞典』の完成、さらに日本研究のためのコレクシヨンの収集、また生きた植物をオランダのライデン気候馴化園に移植栽培して、会社の発展にも寄与し、併せて印刷事業の経営および書籍貿易にも従事したいという企業家としての側面を帯びた来日でもあったが、僅か三年有余の滞在期間では十分果たすことができず、失意のうちに帰国を余儀なくされたのである。

最後に、本稿を執筆するにあたって、東海大学名誉教授向井晃氏、同大学教授沓澤宣賢氏、長崎大学教授姫野順一氏、九州大学総合研究博物館助教宮崎克則博士、ポフム大学東亜学研究所教授レジナ・マティアス博士、フランケンタール地方裁判所公認翻訳士・ハイデルベルグ大学講師生熊文氏、長崎市歴史民俗資料館館長永松実氏、横浜開港資料館調査研究主任平野正裕氏、シーボルト記念館学芸員扇浦正義氏、財団法人東洋文庫山村義照氏など、多くの方々からご教示とご支援をいただいた。そのご好意に対し、ここで厚く謝意を表したい。

## 註

(一) John Mac Lean. Philipp Franz von Siebold on the Opening

フォン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所(石山)

of Japan, 1843-1866. In: The Netherlands Association for Japanese Studies.: Philipp Franz von Siebold. A Contribution to the Study of the Historical Relations between Japan and the Netherlands, Leiden 1978. (横山伊徳著『幕末維新論集7 幕末維新と外交』所収(翻訳「シーボルトと日本の開国一八四三—一八六六」吉川弘文館 二〇〇一年)。

(2) 板倉雅宣著「オランダ商館文書にみる長崎の印刷技術と活字」〔タイボグラフィ学会誌〕〇二 タイボグラフィ学会 二〇〇〇年)。

(3) Dr. Hans Körner: Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts. Leipzig, Johann Ambrosius Barth Verlag, 1967. S. 356-557. (竹内精一訳「シーボルト父子伝」創造社 昭和四九年)

(4) B12. Fae. tit3. Abteilung: Weisser Umschlag. " De door mij te Dezina opgerigte "Nederlandsche Drukkerij" (シーボルト記念館所蔵マイクロフィルム 請求番号 80233)。

(5) 呉秀三著『シーボルト先生其生涯及功業』(吐鳳堂 正一五年)乙編 三九七頁。

(6) 前掲書 註4 四二〇頁。

(7) リームは五〇〇枚、(3)では三三三リームとあるので一、五〇〇枚ということになる。

(8) 前掲書 註4 四二六—四二七頁。

(9) シーボルト再来日の目的の一つである「日蘭英仏辞典」の作製及び刊行のことがあろへ。

- (10) 前掲書 註2 六〇頁。
- (11) 古賀十二郎著『長崎洋学史』上巻 長崎学会編(長崎文獻社 昭和四八年再版) 七〇九頁。
- (12) B12. Fae. 15. MS. Ausarbeitung von Siebold, dat. Nagasaki den 30. Oktober 1859, (Vereinbarung, den Erstunterzeichneten Gdn der Maur betreffend, 4 Conditionen umfassend) holl. Sprache. 1. Blatt. (シーボルト記念館所蔵マイクروفイルム 請求番号 80231)。
- (13) 前掲書 註1 原文八三頁および同書の横山伊徳訳九四頁。
- (14) 野村正徳「出島版」〔洋学史事典〕日蘭学会編 雄松堂出版 昭和五九年 四七〇—四七一頁)。
- (15) 川田久長「日本における洋式活版印刷の沿革」(秀英社大正一五年)、板倉雅宣「日本最初の石版印刷物」(印刷雑誌)二〇〇年六月)、中根勝「日本印刷技術史」(八木書店 一九九九年)、古賀十二郎「海外交渉中心地としての長崎」(『開国文化』朝日新聞社 昭和四年)、神崎順一「天理図書館所蔵の長崎並びに出島版について」(天理図書館報「ヒブリア」一〇三号)、高野彰「幕末の洋書印刷物活字による見分け方」(『東海地区大学図書館協議会誌』昭和六三年四月二五日)等々。
- (16) 『シーボルト日記』—再来日時の幕末見聞記— 石山禎一、牧幸一訳(八坂書房 初版二刷 二〇〇六年二月) 三一—一頁。
- (17) 原資料は、現在ドイツのボンム大学東亜学研究所図書室に所蔵されている。請求番号 460 / XVII-1-B-6 / VI, 20 Okabe [Nagatsune] Surugano kami 岡部 [長堂] 駿河守] (Acta Sieboldiana III. Die Sieboldiana-Sammlung der Ruhr-Universität Bochum. Beschrieben Vera Schmidt, 1989. Otto Harrassowitz Wiesbaden)
- (18) 前掲書 註11 七一一—七一二頁。
- (19) 前掲書 註11 七一二頁。
- (20) 前掲書 註14 三四二頁。
- (21) B12. Fae. 10. MS. Ausarbeitung / Quitung über 450 Gulden G. Indermaur an Siebold, dat December. 1860, holl. Sprache, blaues Papier. 1. Blätchen. (シーボルト記念館所蔵マイクروفイルム請求番号 80224)。
- (22) 前掲書 註2 六四頁。
- (23) B12. Fae. 17a. DS. Prospekt "LETTERPROEF.", Druckprospekt der Druckerei In der Maur, lat. und jap. Schriftzeichen, kleine handschriftliche Anmerkungen, Bleistift, Format. 29cm x 45cm. 1. Blatt. (シーボルト記念館所蔵マイクروفイルム請求番号 80234)。
- (24) B12. Fae. 20. DS. Prospekt, von Siebold herausgegeben, "Niederländische Druckerij", dat.Desima. Augustus 1860, holl. Sprache, blaues Papier. 1. Blatt. (シーボルト記念館所蔵マイクروفイルム請求番号 80237)。
- (25) シーボルトの自筆『日記』については、『独文日記』は

- 二〇〇五年(平成一七)に八坂書房から『シーボルト日記』―再来日の幕末見聞記―(石山禎一・牧幸一訳)として出版。『蘭文日記』は、長尾正憲著『福沢屋論吉の研究』(第三章 シーボルト文久元年の日記について(史料))『シーボルトの一八六一年の日記』思文閣出版 一九八八年(昭和六三)がある。ただし、『蘭独混合文日記』は未解読である。
- (26) 板沢武雄著『日蘭文化交流史の研究』(吉川弘文館 昭和三六年 五〇四―五一四頁)。
- (27) 前掲書 註14 二八―二九頁。
- (28) 52MS, Empfangsbestätigung von Indermaur an Bauduin, dat. Desima 7 mat 1861, holl. Sprache. 1 Blatt. (シーボルト記念館所蔵マイクロフィルム 請求番号 91047)。
- (29) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古文書』幕末外国関係文書之三六 東京大学蔵版 昭和六一年四月 復刻再刊:「八三 二月長崎奉行上申書 老中へ シーボルト貨幣引換方につき書面差出の件 シーボルトより本国江送候書面和解 日本貨幣一件開章 (万延元年申二月 オランダ通詞荒木熊八和解 千八百五拾九年十一月廿七日未十一月四日 シーボルト認之『水野忠徳雜録』収載)。なお、オランダ通詞荒木熊八の原文翻訳「シーボルトより本国へ送る書面和解:日本貨幣一件開章」の原史料は、九州大学・九州文化史研究施設、松本文庫 五二に所蔵されている。
- (30) 武藤長蔵著『対外交通史論』(東洋経済新報社 昭和一フオン・シーボルトが創設した出島オランダ印刷所(石山) 八年 二五三頁)。
- (31) 前掲書 註30 二五―二八四頁。
- (32) 『ボンベ 日本滞在見聞記』―日本における五年間―沼田次郎、荒瀬進共訳 新異国叢書 第1輯 第10巻 雄松堂書店 一九六八年 二七八―二七九頁)。
- (33) 前掲書 註11 七一―七一九頁。
- (34) 前掲書 註2 七一頁。
- (35) (36) 前掲書 註1 原文八四頁、訳文九五頁。
- (37) 前掲書 註1 原文八三頁、訳文九五―九七頁。
- (38) B12. Fae. 11. MS, Ausarbeitung / Quitung von G. Indermaur an Siebold, dat. Decima 1. Nov. 1862, holl. Sprache, blaues Papier. 1. Blätchen. (シーボルト記念館マイクロフィルム請求番号 80225)。
- (39) 長尾正憲著『福沢屋論吉の研究』(思文閣出版 一九八八年 四九九頁)。
- 以上